

3 - 12 50 万分の 1 活構造図「東京」(第 2 版)の刊行

Publication of the 2nd Edition of Neotectonic Map Tokyo at Scale 1:500,000

地 質 調 査 所

Geological Survey of Japan

工業技術院地質調査所は 1997 年 12 月に、活構造図、地震構造図、重力構造図の 3 図からなる 50 万分の 1 活構造図「東京」(第 2 版)を出版した。

各地図は東経 138 度～141 度、北緯 34 度 30 分～36 度 30 分の首都圏域をカバーし、東京(島嶼部を除く)・神奈川・千葉・埼玉・山梨の各都県の全域と茨城・栃木・群馬・長野・静岡の各県の一部を含む。

活構造図(第 1 図)には、活断層や最近の地震で動いたことが分かっている断層(地震断層)、古い地質断層などを種類別に、赤、緑、青、黒色の線で表示した。関東平野や小田原付近などの活断層の分布は、旧版とはかなり変わった。また、約 170 万年前に始まる第四紀の地層・火山の詳しい分布を、地層や岩石の違いによって色分けして示した。特に、第四紀火山の表示は一新された。また、第四紀後期の構造運動の特徴をより明確に視覚的に捉えられるように、最終間氷期から最終氷期前半に形成された中位段丘を新旧に二分し、完新世段丘を新たに表示した。

地震構造図(第 2 図)には、この地域で過去に起きたマグニチュード 6 以上の地震の震央を、震源域の広さに比例する大きさの円で表示した。震央円の横には地震の発生した年月日を付記し、いつ、どこで大きな地震が起きたか一目で分かるようにした。また、駿河トラフ及び相模トラフ沿いの巨大地震の震源域を青色の楕円で近似して示した。さらに、太平洋プレートとフィリピン海プレートの上面の深さを等深線で示した。

重力構造図(第 3 図)には、地下の密度構造を反映するブーゲー異常(仮定密度: $2.3\text{g}/\text{cm}^3$)を等重力線で表示した。等重力線は正異常は赤色、負異常は青色で、2.5 ミリガル間隔で表示した。また、関東地方については、概ね先新第三紀基盤の深度に対応する重力基盤深度を 500m 間隔の段彩により表現した。丹沢山地周辺、房総・三浦地域、富士川下流域などでは、重力構造と活構造との対応が顕著に認められる。

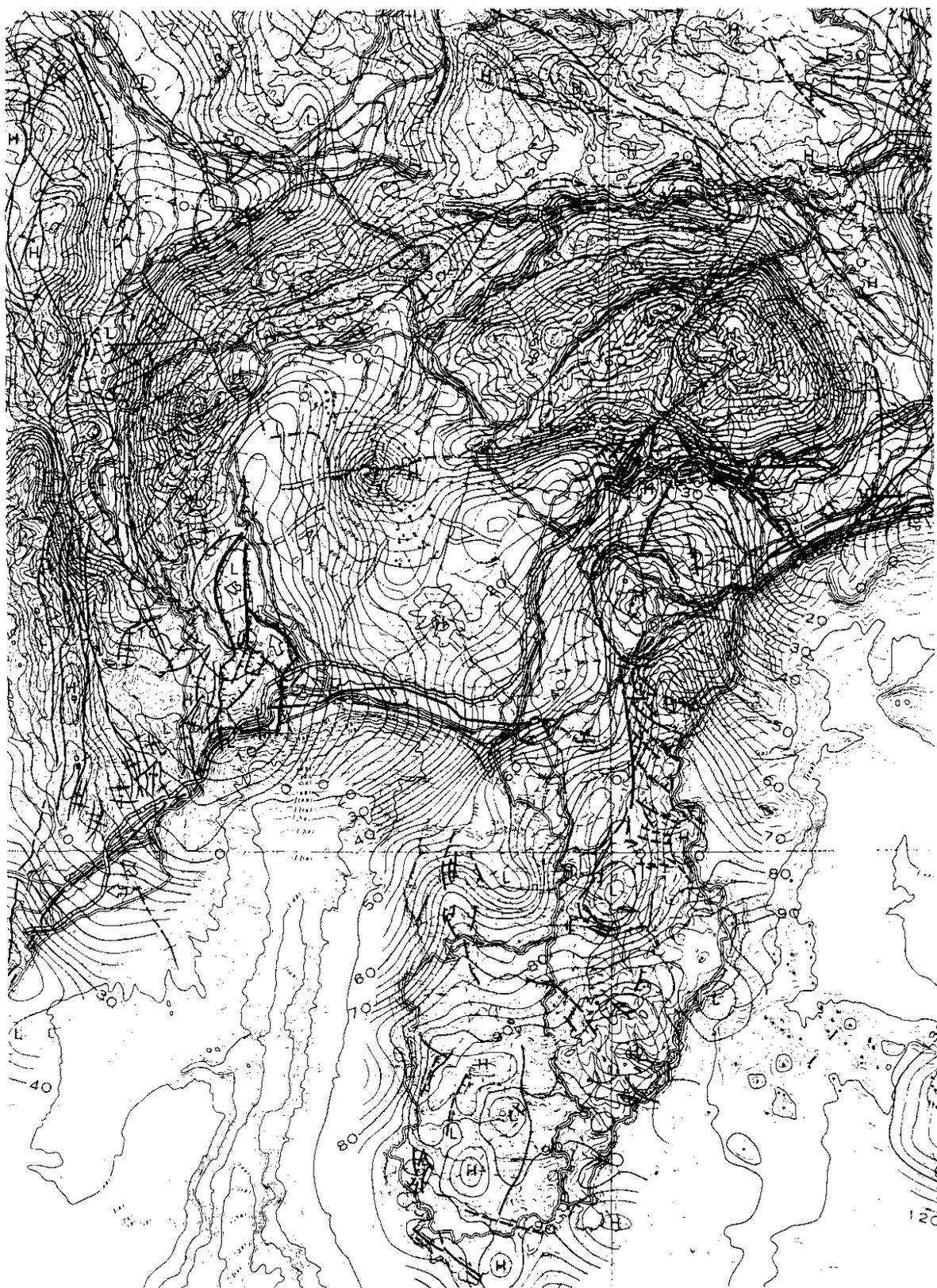
地震構造図と重力構造図にも、活断層などの構造要素の分布を重ねて入れ、地震や重力構造と構造要素との関係が一目で分かるようにした。また、各地域の活断層、地震、重力構造の特徴などについて簡単に解説した説明書をつけた。

(文責 杉山雄一)



第1図 50万分の1活構造図「東京」第2版(一部)

Fig.1 A part of the 2nd edition of neotectonic map Tokyo at scale 1:500,000.



第3図 50万分の1活構造図「東京」第2版の重力構造図(一部)

Fig.3 A part of the gravity tectonic map of the 2nd edition of neotectonic map Tokyo.